

教育研究創発国際研修における学術活動報告書

令和 5 年 1 月 30 日

氏名 王 ギョク

所属 教育心理学 コース

指導教員名 遠藤 利彦

1. 研究課題 海外（スタンフォード）集中講義の受講
2. 計画する学術活動の実施期間 令和 5 年 1 月 23 日 ～ 令和 5 年 1 月 27 日
3. 日本学術振興会特別研究員 (DC) の現在の採用状況 DC1 DC2 採用無し
4. 計画する学術活動の財源
 - 研究科教員の研究プロジェクト
 - 研究科・附属センタープログラムによる
 - 日本学術振興会特別研究員 (DC)
 - 研究科外の奨学金または自費
 - その他
5. 学術活動
 - 国外 国内
 - ①英語論文公表
 - ②研究科教員の研究プロジェクト参加
 - ③フィールドワーク
 - ④国際会議 (研究発表 運営補助 出席のみ)
 - ⑤研究会 (研究発表 運営補助 出席のみ)
 - ⑥研究指導委託
 - ⑦留学
 - ⑧国際研修
 - ⑨国際インターンシップ
 - ⑩その他 (具体的に: 海外集中講義、現地調査)

5. 学術活動実施の概要

※上記4で選択した学術活動について具体的に記載してください。括弧内の概要を必ず記載してください。

- ① 英語論文公表
(著者、発表論文名、掲載誌名等、発表年月巻号、発表年月日等、論文内容の概要)
- ② 研究科教員の研究プロジェクト参加
(プロジェクト名、代表研究者名、自身の具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、プロジェクトの概要)
- ③ フィールドワーク
(調査先機関等、国名・都市名、具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、調査先の概要)
- ④ 国際会議
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、学会・会議名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑤ 研究会
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、研究会名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑥ 研究指導委託
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究、研究テーマと受入教員、受入期間(年月日)、具体的な研究活動、研究発表内容等の概要)
- ⑦ 留学
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究科、受入期間(年月日)、具体的な履修状況、研究発表内容等の概要)
- ⑧ 国際研修
(プログラム名、派遣先機関、国・都市名、派遣期間(年月日)、プログラム概要、研究発表内容等の概要)
- ⑨ 国際インターンシップ
(プログラム名、派遣先機関、配属部署、国・都市名、派遣期間(年月日)、具体的な活動、プログラム内容等の概要)
- ⑩ その他(具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度等の概要)

学術活動区分 (①～⑩を記入)	⑩ その他・海外集中講義
<ul style="list-style-type: none"> ● 【海外集中講義(2023/1/23~2023/1/27)】 <講師および講義テーマ> <p>Dr. Sharon Palmer, Senior Associate Vice Provost for Undergraduate Education “Stanford Undergraduate Education and the Work of VPUE” https://undergrad.stanford.edu/</p> <p>Professor Marisa Galvez “SLE (Structured Liberal Education) Program” https://sis.stanford.edu/structured-liberal-education-sle</p> <p>Professor Dan Edelstein, “COLLEGE (first-year Civic, Liberal, and Global Education requirement)” https://college.stanford.edu/</p> <p>Dr. Patrick Dunkley, Vice Provost for Institutional Equity, Access, and Community “Equity and Access/ IDEAL for Staff” https://equity.stanford.edu/ https://ideal.stanford.edu/</p> <p>Dr. Gina Hernandez-Clarke, Director of Community Engaged Learning (DCEL) in the Arts “Art Intensive Program at Stanford” https://artsintensive.stanford.edu/ https://haas.stanford.edu/</p> <p>Dr. Cassandra Volpe Horii, Director of the Center for Teaching and Learning, and her colleague(s) “Work of CTL” https://ctl.stanford.edu/</p> <p>Professor Kiyoteru Tsutsui, “Japan Program at APARC/ Questions from students” (Japanese Session) https://aparc.fsi.stanford.edu/japan https://www.ktsutsui.org/</p> <p>Berkeley Visit on January 25th (Wed.)</p>	

AM

Visit JSPS San Francisco (Japanese Session)

https://www.jspsusa-sf.org/index_j.php

PM

Dr. Julian Ledesma, Executive Director, Centers for Educational Equity and Excellence (CE3)

“Enhancement of Diversity and Inclusion/ Support for First Generation Students”

<https://ce3.berkeley.edu/>

<https://diversity.berkeley.edu/>

Professor Victoria Robinson, American Cultures Program Director

“American Culture Program at Berkeley”

<https://americancultures.berkeley.edu/>

- (注) ① 年月日は西暦で記入してください。
② 英語論文発表については報告する学術活動において発表又は受理されたもの。
③ 上記に記載しきれない場合は、ページを追加しても差し支えありません。
④ 複数回の学術研究活動による報告の場合、適宜本ページを追加し、2つ目以降についても必要な内容を網羅してください。

6. 学術活動による成果

※報告する学術活動について、教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とした教育研究創発国際研修の趣旨に照らし、その成果を具体的に記載してください。学術活動により得られた自身の研究課題につながる成果についてもわかるように記載してください。

※本欄に書ききれない場合、ページを追加しても差し支えありません。

- **教育カリキュラムの設定について**
 - 学士課程でリベラルアーツカレッジタイプの教育（少数、全寮制、全人的サポート）のプログラムである SLE Program が設定されています。その中では、学生同士や学生と教員の交流が寮で簡単に行われます。大学 1 年生から大学生活の慣れや知識の学びなどに関する課題について、対話と協働の中で最初の段階で、サポートのある環境の中で考えさせることは有益であると思います。
 - ライティングのスキルの訓練が 1 年生からかなりの練習の量で行われることが印象的でした。今後の学術的アウトプットのため、いかに文献を探し・読み、そしていかに考えを整理・産出するかという一連のプロセスは学士課程の中で重視すべきだと考えられます。
 - グレートブックスプログラムについては、アメリカの教養教育における伝統のひとつであると指摘され、多文化、多様性理解がカリキュラムの中に融合していることが現代の教育に特に必要であると考えられます。
- **学生の支援について**
 - スタンフォードでは、*The Work of Dean of Students Office* という学生支援機構が運営されています。その施設ではほぼ全ての在学生の可能な生活や学術課題を考慮して、成熟的な部局設定で、学生の人間としての成長やその主体性を重視し、多様・多面的な支援を組み込んでいると言えます。パークレー大学での学生支援についての講演を拝聴させて、特に校内の First-generation 大学生や学生の多様性（異なる人種や社会地位の学生の招き）を重視されているような印象が残り、キャンパス内の学生も高度な個性化が示していると思います。比較してみると、スタンフォードは豊かなりソースに支えられて、学生の大学生活・心理的困難・法律的問題・学術的支援など多層で繊細な支援ワークが形成されていると思います。そこから得られる啓発というと、順調に大学生活を過ごすということを学生支援の目標とすることのみではなく、いかに困難を克服させ、または自身の権益を守ることをしてしながら、自身の成長と社会貢献をし、独立的な自己価値観を形成できるかということを目指すべきだと思います。またその過程において、ピアサポートは特に中核的であり、ピアサポートを通して各種大学や民間の支援リソースにリンクさせることは、学生にとって接触・相談しやすい形である一方、支援の効率も高くなれるかと考えられます。